

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「県民とともに進める『しあわせ信州』の創造」
日 時 平成 25 年 7 月 17 日（水） 午後 6 時から午後 7 時 30 分まで
場 所 須坂市文化会館メセナホール 小ホール

鼎談参加者

○長野県知事 阿部守一

○宮坂 公美 氏 （宮坂醸造（株） ショップディレクター）

東京都出身。大学卒業後、宮坂醸造（株）社長の宮坂直孝氏と結婚され、
諏訪へ。

二男一女の母となり、末子の小学校入学を機にセラ真澄（Cella
MASUMI）を開店されました。日本酒の魅力を器や小物、料理、建物な
どの日本文化で演出し、外国からも注目されています。

I ターンの木工作家、農家レストラン経営者などとも親交を深める中で、
信州の日常生活から見出した魅力を発信し続けています。

○野池 明登（長野県観光部長）

目 次

知事あいさつ・「しあわせ信州創造プラン」の概要説明	1
鼎談テーマの趣旨説明	8
鼎談	9
会場との意見交換	23
知事あいさつ	28

知事あいさつ・「しあわせ信州創造プラン」の概要説明

【長野県知事 阿部守一】

皆様、こんばんは。今日は、ありがとうございます、宮坂公美さんという素晴らしいゲストをお迎えして、県政タウンミーティングを須坂市で開かせていただきました。大変大勢の皆様方にお集まりいただきましたことをまずは御礼申し上げます。今日の主なテーマは「信州ブランド戦略」ということですが、その前に今回、県として策定しました新しい総合5か年計画「しあわせ信州創造プラン」について、私からお話をさせていただきたいと思います。今日、皆さんのお手元には「しあわせ信州創造プラン」の概要説明資料という2枚紙と冊子の「しあわせ信州創造プラン 概要版」（以下、概要版）をお配りしていますが、概要版の方でお話したいと思います。

まず、「しあわせ信州創造プラン」を聞いたことあるという方、どれぐらいいらっしやいますかね。いっぱい手が挙がっている。ありがたいですね。「いや、そんなこと聞いたことはなかった。」という人はどのくらいいますか。遠慮しないで。なるほど。やはりまだまだ我々の普及啓発の努力が足りないなというふうに思います。

田中知事のときは5か年計画を作らないという方針でやっていたのですけれども、村井知事のときに作った計画があって、私の任期前半はその計画を引き継ぎました。県の総合5か年計画は県議会の議決が必要になっている計画ですので、知事が替わっただけで変わらないという計画です。新しい計画は今年度4月からスタートさせた計画で、「しあわせ信州創造プラン」というのは、今回の長野県の総合5か年計画の愛称です。

「しあわせ信州創造プラン」の愛称は、私が是非付けたいということで付けさせてもらいました。なぜかという、県の計画なのですけれども、県民の皆さんと一緒に進める計画にしたいと、目標を共有して一緒になって実行する計画にしていきたいというふうに思っています。総合5か年計画と言っても、ずっと5か年計画を作り続けていますし、いつの総合5か年計画だか分からない。これは私の主観ですけれども、5か年計画では響きが冷たいと思っています。それでは県民の皆さんと一緒に進めようという話にしづらいなということで、今回、愛称として「しあわせ信州創造プラン」と名付け、是非皆さんと一緒に取り組む計画にしていきたいという思いで作っています。

今回の計画の全体を見渡していただけるのは、概要版の2ページ、3ページのところです。最も忙しい方はここだけ見ていただければ大体どんなことを意図して作っているかというのが、大雑把な話は分かるという部分であります。皆さんに強調してお伝えして、是非頭に残しておいていただきたいなという部分は、2ページの第2編というところの「基本目標」です。これは表紙のところにも書いてあるのですけれども、今回の「しあわせ信州創造プラン」の基本目標は、「確かな暮らしが営まれる美しい信州」であります。

「確かな暮らしが営まれる美しい信州」。これは是非県民の皆さんと一緒に共有

させていただきたいと思っています。「確かな暮らし」というのは、明日への希望を持って暮らすことができる、そして、いざという時には支えてもらうことができる安心感がある、そうした社会です。そうした暮らしを実現していきたいと思っています。

今、例えば自殺者の数。ここしばらくいろんな取組をしてきたので、減少傾向にはあるとはいえ、毎年、今でも長野県で400人を越える方が自ら命を絶たれているという状況であります。あるいは子供たちに目を向けても、いじめの問題であったり、不登校の問題であったり、明日への希望が本当になくなりつつある。これは変えていかなければいけない。明日への希望を持てるような社会にしていかななくてはならないということを強く願っています。

そしてもう一つは、だんだん日本の社会も変わってきて、長野県は私はまだいいと思っていますが、都会へ行けばもう隣は何をやっている人だかさっぱり分からない。道で倒れている人も、もしかしたら酔っ払いかもしれないし、からまれるかもしれないので声さえかけない。満員電車に乗るときは、都会の暮らしをずっとやっていると、そういうことに慣れてしまうのですけれども、最近非常に違和感を持っているのは、満員電車に乗るときに人の背中を平気で押して乗り込むのが当たり前です。こういう社会になっていますけれども、やはり最後は人間は一人では生きられないわけでありまして、それはやはりみんなで助け合おう、あたたかい社会を作っていこうという目標でなければいけないだろうというふうに思っています。それは地域のつながり、一番ベースには家族があると思いますけれども。けど今、一人暮らしの方々も増えています。家族の中でもいろんな問題があります。やはり地域が支えよう。コミュニティが支えていこう。けどコミュニティの力もかつてより弱まっている部分もあります。それはコミュニティに対する支援も我々していかなくてはならないですけれども、コミュニティの弱いところは行政がもっと応援していかないといけないと思っています。須坂市の三木市長もお越しいただいていますけれども、市町村や県がしっかりしていかなければいけない。そういう中で、重層的に人々の暮らしをあたたかく支えていく社会にしていきたい。そういう思いを込めて、この「確かな暮らし」とうたっています。

それから「美しい」。長野県は今さら言うまでもなく、美しい県だと私は思っています。自然も景観も環境も美しい県であります。もう一つ、この美しさに我々が込めているのは、人々の営みの美しさということもあると思っています。長野県は年をとっても働いている方が一番多い県であります。それからあとでブランドの話が出てきますけれども、やはり勤勉な県民性であります。そういう人々の営みにおける、自然だけじゃなくて、人々の営みの美しさ。そういうことも含めて、この「美しい信州」というのを是非もっと進化させていきたい。今の美しさを守るだけではなくて、もっと進めていきたい、そういうふうに思っています。そういう意味で、基本目標を「確かな暮らしが営まれる美しい信州」という形にさせていただいています。

では、それを進めていく、実現していく上でどんなことをやっていくか。県の

総合5か年計画、この「しあわせ信州創造プラン」は県の計画ですから、一応と言うと怒られるかもしれないですけど、いろんなことを一応全部書いています。3ページのところに書いてありますけれども、右側の所に「施策の総合的展開」ということで、「産業・雇用」から始まって、「地域づくり」、「環境」、「安全」、「社会基盤」、「健康・福祉」、「教育・子育て」。優等生的な答案を書かなければいけないので、あらゆる分野を網羅的に書いています。でも今までの計画は、実はこの第5編のところがいわばメインになっていたのですが、私は少し変えようと。もちろん全部やらなければいけないことなのですけれども、例えば、「危機管理体制を強化しましょう。」というのは、それは別に敢えて言わなくても、やらなければいけないです。そのやり方の濃淡というか、メリハリの付け方がありますけれども、安全、安心を守るというのは、行政の基本的な仕事でありますから、そういうことを今さら「ああでもない。こうでもない。」と言っても仕方がないというふうに思っています。むしろ、この5年間、どこに力を入れてやっていこうという姿勢なのかというのをできるだけはっきり出していった方がいいというふうに考えて、2ページのところに書いてある第3編でありますけれども、「今後5年間の政策推進の基本方針」ということで、三つの方針とそれから一つの発信。発信は今日のメインテーマなので、あとでご説明するようにしますが、三つの方針にいろんな資源を集中していこうということ、今回の計画「しあわせ信州創造プラン」は組み立てています。

方針の1。ご覧いただいているように一つは『貢献』と『自立』の経済構造への転換であります。基本的に我々の暮らしを安定感のある暮らしにしていかなければいけないわけでありまして、暮らしを支えていく上で、やはり産業が元気でなければ我々の生業が成り立っていかないわけでありまして。そういう意味で一番目の柱にこの経済産業のところを打ち出させていただいています。

『貢献』と『自立』と「経済構造への転換」。ありがちなのは、経済の活性化とか、産業の振興という話ですけども、いろいろ議論があるかもしれないですけども私は「転換」しなければいけないと思っています。長野県全体、県庁全体を挙げて、この産業・経済をしっかりと立て直していこう、元気にしていこうということで「長野県産業イノベーション推進本部」というのを県庁は作っているのですが、今日は、多摩川精機の萩本範文社長にお越しいただいて、萩本社長からも発表していただいて意見交換をさせていただきました。長野県ももちろん、産業全部そうなのですけども、やはり時代のニーズ、時代の変遷とともにやはり変わっていかなければいけない。いつまでもしがみついているとやはり成長していくことはできなくなってしまう。これは私がそう思っているわけですが、萩本社長も同じような視点で今日お話をさせていただいたわけです。

長野県の経済、例えば、ものづくり産業は、一番の長野県の稼ぎ頭です。観光であったり、あるいは農業、林業であったりも、もちろん重要な産業でありますけれども、長野県の外に物を売って、一番稼いでいただいているのは製造業です。製造業も昔の生糸産業からスタートして、どんどん進化、変化をしてきているわけです。これからやはり日本の中の需要や人口は減っていくので、国内だけを考

えていてもなかなか物は売れていかない。世界的に考えていったときに、どんな分野が求められているかということを見ると、環境・エネルギー。今、日本は原発をどうしようかという議論をやっているわけですがけれども、世界の国々では、エネルギーの問題や環境の問題、例えばお隣の中国はどんどん経済成長しているわけですがけれども、我々が通ってきたような公害問題とか、そういう問題に向かわざるを得ない状況になっているわけです。

あるいは長野県の誇れる医療、健康ですよ。健康長寿、日本一。今日お集まりの皆様方にはお礼を言わなければいけないですけど、皆さんの取組のお陰もあって、男性も女性もお陰様で寿命は日本で一番だということになりました。これは、県民の皆さん一人ひとりのお取組の成果であります。ここ須坂市は保健補導員発祥の地と言われていています。長野県の健康長寿は一人の人が頑張って達成されたということではなくて、やはりいろんな人たち、食生活改善推進員の皆さんだったり、保健補導員の皆さんだったり、もちろん医療関係者の皆さんもそうですし、いろんな人たちが健康について向き合っただ道な取組を繰り返したことが、今の長寿世界一、日本は今 WHO の調査では一番寿命が長い国になっているわけですから、そういう意味では世界一の長寿地域になっているということでありまして、これは県民の皆さんのお陰であります。こういうものをもっと我々発信していかなければなりませんし、例えば製造業であっても、あるいは観光であっても、もっと健康とか医療とかそういうものと結びつけた発信をしていかなければいけない。ものづくり産業においても、これから世界的に伸びていくのはこの医療や健康の分野であるわけでありまして。

長野県は健康長寿県というある意味でブランドがあるわけでありましてから、そういうものと、ものづくり産業や、あるいは今日宮坂さんにお越しいただいていますが、宮坂さんのお酒のように食品というのも健康長寿と非常に縁が深いわけでありましてから、そういうものをやはり我々しっかりとコラボレーションする中で、産業の組立をしていかなければならない。今日のメインテーマである「発信」をしていかなければいけないというふうに思っています。

そういう意味で、この「経済構造の転換」ということをしっかりやっというふうに打ち出しています。

『貢献』と『自立』ということとは、私がこだわって付けていますけれども、「自立」の方が分かりやすいので、「自立」。環境エネルギーの問題も含めて、例えば道州制の議論を知事会でやっても、なんとなく都会と長野県のような農山村地域が多いところが対立関係になっているような形で捉えられがちなところがあります。私は実は都会の人たちが結構錯覚しているなと思っているのは、都会の人たちは自立しているという感覚が比較的強いですよ。けれども、私は都会の方がいわゆる地方よりも自立度が低いと思っています。これはもう明らかだと思っています。我々が生きていく上で必要なのは食糧ですけど、東京都の食糧自給率なんか1パーセントあるかないかですかね。全然自立していませんよ。エネルギー。もちろん電力会社の本社は東京だったり、名古屋にあったりするわけですがけれども、じゃあ、どこで電力を作っているのか、もう福島原発の事故でよく

分かったように、別に消費地で作ってないので、地方で作っているわけですね、エネルギーは。あと、生きる上で重要なのは水。長野県は上流県でありますから、長野県の森が、長野県の土地がいろんなところの水源になっているわけですね。そういう意味で、水だとか食糧だとかエネルギーだとか、我々が活動していく上で必要なものの自給率ってどうなっているのと考えたときには、長野県の自給率は都会に比べれば実は非常に高い。もちろん東京電力とか関西電力は、うちの県で発電して他のところに持って行っていますから、そういう意味では、自分のところで使えばもっと自立度が高くなるわけですがけれども、しかしながら全体的に見れば自立度高いわけでありまして。そういう地域的な自立度というのを、私はもっと高めていきたいというふうに思っています。

エネルギーの問題をどうするかは、これから日本の岐路になっていくと思えますけど、今ほとんど石油、石炭、天然ガス、海外に依存しているわけですね。海外に依存していること自体が悪だとは思わないのですが、海外に依存しているということは、いろんな意味で不安定なのです。先ほど、私は安定した暮らしということで申し上げましたけれども、例えば為替が変動すれば、ガソリンの価格、すぐ上がったり下がったりするわけでありまして、石油というのはメジャーが仕切っている世界でありますから、我々がコントロールできない。もちろん長野県もコントロールできなければ、日本国でもコントロールできない世界で動いているわけです。そういうところに我々の生きる根幹を依存しているのが今の暮らしですけれども、でも、太陽光だって小水力だってバイオマス発電だって、もっと身近にエネルギー源があるのに何でわざわざそんな不安定なブラックボックスなエネルギーに依存していかなければいけないんだと私は思っています。

そういう意味で、いろんな意味での自立度を上げていくということは、安定した暮らしにとって私は不可欠でありますし、東京とか大阪とか横浜とかに比べて、そうした自立に向けて近い距離にあるのが我々の長野県だというふうに思っています。そういう意味でこの「自立」をうたっています。

「貢献」というのは、産業すべてそうですけれども、自分さえ良ければいいとか自分だけもうけようなんて言っていたら、決して長続きした商売はあり得ないと思っています。人のためにどう役に立てるのか。今日、萩本社長も社会的使命感とおっしゃっていましたが、やはり産業の原点は社会的な使命感、我々行政はもちろん社会的使命感がなければいけないわけですが、後で宮坂さんにその辺をまた教えていただければありがたいですけど、企業活動であっても、例えば人の暮らしをどう豊かにしようとか、例えば観光であれば人々にどうやって満足して帰っていただけるかとか、そういう人のためにどうすればいいかということに知恵を出すことによって、自分たちの商売も成り立つし、そういう使命感を持って工夫をしていくことによってイノベーションが起きる、世の中を変えていくということに繋がるわけでありまして、この「貢献」というのはこの産業、経済を語る上で私は実は重要なキーワードだと思っています。そういう意味で、『貢献』と『自立』の経済構造への転換」ということを方針の1に掲げています。

方針の2は「豊かさが実感できる暮らしの実現」。これは、医療の話と雇用の話、社会参加の話、それから景観、環境、文化。私たちが日々暮らしていて、本当に良い社会だなというふうに思ってもらえるようにするには何が必要かというふうに考えたときに、やはり自分たちの能力が発揮できる場がなければいけないし、いざ病気の時にはきちんと対応してもらえるような社会でなければいけないということで、雇用と医療、そして文化、景観、環境ということはこの方針の2で重視をしていこうということで打ち出しています。

先ほども控え室で宮坂さんとお話したのですが、長野県では、生活文化課ということで、文化の位置づけが県行政では少し低いと正直思っています。これから「本当に豊かだな」と思ってもらえるような社会を目指すには、やはり文化とか、必要最小限の行政とは違ったところにやはり力点をおいていかなくてはいけないと思っていて、そういう部分をこの方針2に込めさせていただいています。

それから方針の3は「『人』と『知』の基盤づくり」。すべての物事の起点はやはり人です。人という観点で今、全国的にも長野県でも課題になっているのは、もう今や人口が減っていく社会になっているということです。一昔前の行政の計画は右肩上がりで人口が増えることを計画して、そうならないにしてもそうなるかのような前提でいろんなことを組み立てていました。もう今やそんなことは絶対にできない時代です。もう人口が減るということを前提にいろんなことを考えていかなければいけないわけですが、人口が増えるのと人口が減るのでは、いろんな物事の仕組みを180度変えていかなければいけないわけであり、県の行政じゃない、例えば年金でも、人口が増えていくときの年金制度と人口が減っていくときの年金制度が同じですむわけがないのです。消費税の導入に関連して社会保障の国民会議を今作って、社会保障をどうやって持続可能なものにしていくかっていうことを国レベルで議論してもらっているわけですが、人口増減の方向が180度変わっているということは、やはり世の中の仕組みをもう一回原点に立ち返って、作り直していかなければいけないという話です。我々は人口減少を所与のものとして受け止めるだけではなくて、人口の自然減がなるべくゆるやかになるように取り組まなければいけない。これは結婚したい人は結婚してもらって、子供を作りたい人は子供を作れるような環境を作ることによって、今、長野県の合計特殊出生率1.51で、全国よりも0.1ポイント高い水準ではありますが、もっと上げていかなければいけないというふうに思っています。

それから人口の社会増減。長野県はおかげさまで移住したいなと思っている方が結構多いですね。『田舎暮らしの本』という本では、4年連続長野県は移住したい県ナンバーワンであります。けど今まで一部の市町村を除いて、移住者の受け入れを積極的にあまりやってこなかった。県は移住・交流課という課を新しく作って、来たい人はできるだけ受け入れようということで取組を始めてきています。人口の社会減をなんとか社会増に近づけていきたいと取り組んでいるところでもあります。

それから、もう一つはやはり人々の教育。偉そうなことを言ってもいけませんけど、能力を伸ばしてもらおうということは長野県の発展にとって極めて重要なテーマであります。長野県は教育県と言われて久しかったわけですがけれども、今や多くの県民の皆さんが「もう、教育県じゃないのではないか。」というふうに思ってしまうようになっていきます。これは残念なことだと思っています。私はもう一回、胸を張って教育県だと言えるようにしていかなければいけないということで今、教育再生に力を入れてやっています。中学校3年生まで30人規模学級をやりましたし、これから信州型コミュニティスクールを普及していこうというふうに思っています。発達障害の子供たちの支援もしっかりやっていかなければなりませんし、いろんな特別支援学校の話も須坂市でも、熱心に取り組んでいただいていますけれども、これは県の責任としてしっかり取り組まなければいけないということで、今、健康福祉部、教育委員会と財政課で方向付けをしていかなければいけないと思っていますところでもあります。

そうした教育、人づくりということにこれからの成熟社会においては、今までの高度経済成長のときとは人の作り方、人の育て方を私は変えなければいけないというふうに強く思っています。今まで工業化社会とか産業社会においては、ある意味で均一的な人材を育てることが国力の増加にもつながったし、経済の発展にもつながったわけですがけれども、これからはAさんもBさんもCさんも同じこと考えて、同じことができるということじゃなくて、やはりA君はA君の才能、B君はB君のできることに、C君はC君がやりたいことに、そういうものをきちんと伸ばしてあげなければいけないだろうと思っています。障害を持った子供もすごい能力を私は持っているというふうに思っています。私ができることをできる子供たちが、いっぱいいます。そういう一人ひとりの個性にあった教育をしっかりしていかなければいけないというふうに思っています。

それと同時に、県立大学の話、今いろいろ議論になっていますけれども。高等教育も含めて教育のあり方を変えていかなければいけない。人口が減る中で、子供の数が減る中で、何で県立大学が必要なのだという議論もあります。だけど私は成熟社会であるからこそ、人づくりにもっと投資をしなければいけないと思っています。日本の大学進学率は決して先進国の中では高いとは言えない。何となく結構みんな大学に行く人が増えてしまったので、昔に比べると、日本は高学歴社会だという錯覚に陥っているようなのですが、全然そんなことはないです。今、例えば台湾の人たちといろいろ交流させてもらっています。去年も台湾に行きましたけれど、台湾の地方政府の人たちはほとんどマスターです。大学院を出ています。長野県の職員で大学院を出ている人っていうのは、技術系の人にはそこそこいるけども、ほとんど事務系の人にはいない。ましてドクターはいないですよ、ほとんど。これからグローバルな社会の中でいろんな取組をしていかなければいけない。製造業も観光業も農業なんてそうですよね。そういうときに国際社会の中でやはりしっかりと議論して、そして相手の国の文化とか背景とかそういうことも分かって、日本の良さを発信していくこと抜きに日本は国際社会の中では絶対に生き残れないと思っています。でもそういう人材が、私は日本には非常

に少ないということを感じています。今、大学作るのも、いろんな大学の先生方とかいろんな人たちと話していると、やはり日本は教育面では非常に閉じた世界の中でちまちまやっているなというふうに改めて実感をしています。今度軽井沢にはアイザック軽井沢のインターナショナルスクール・オブ・アジアということで、アジアのリーダーを作っていこうという志でハイスクールができますけれども、本来長野県は人づくり、人材育成に投資をしてきた地域なわけですから、是非この人づくりのところは皆さんと一緒になってもっともっと、これは学校教育だけではなくて、例えば農業大学校とか福祉大学校とか林業大学校とか、工業分野においても技専校とか工科短大とかそういう人材育成機関があるわけでありまして、そういうものを長野県として、もう一回しっかり煮詰め直してこの人づくりに投資をしていきたいというふうに思っています。

早口で説明しましたが、この方針1、2、3をしっかりとこの5年間、集中的に取り組んでいきたいと思っていますし、3ページのところに第4編で「プロジェクトによる施策の推進」と書いてありますが、今言った三つの方針をどう具体化するかということプロジェクト方式を進めていこうというふうに考えています。

是非この「しあわせ信州創造プラン」、皆さんと一緒に実現していきたい計画であると、そして基本目標は「確かな暮らしが営まれる美しい信州」、政策推進の基本方針は三つあるということ、あとでまたこの内容に触れたいと思いますが、県民の皆さんと目標を共有して一緒に取り組んでいきたい計画だということ是非ご理解をいただきたいということをお話しして、あとは宮坂さんとの鼎談に入りたいと思います。

鼎談テーマの趣旨説明

【観光部長 野池明登】

『信州ブランド戦略～コンセプト編～』の概要」を簡単に説明をさせていただきたいと思います。

これは今年の3月に県庁、それからさまざまな経済団体、それからNPOの皆さんの声を集めて作ったブランド戦略でございます。行政だけのものではありませんし、たまたま観光部でその取りまとめをさせていただきましたけれども、観光のブランドというだけではございません。非常に幅広いブランド戦略でございます。

少し前は、信州というと圧倒的な良いイメージ、知名度があったのですけれども、最近ではさまざまな県、さまざまな地域がいろんな戦略で売り出しをしております。信州、長野県のイメージが、相対的に弱まっているのではないかなとそんな問題意識を持っております。

左側真ん中に「目指す姿」とありますけれども、信州の商品やサービス等の付加価値を向上させたい。あるいは長野県に行きたい、住みたい、こういった付加価値を是非高めたい。それから国内、海外にこの信州の素晴らしさを本当に伝え

たいというふうに思っております。また究極の選択、ふるさと以外に住む場所を求める移住、長野県に住みたいと思う人をもっと増やしたい、こういうふうに思っております。

真ん中の上に『ブランド』とは」という少し固い表現があります。ブランドと言いますと、そのマークを見たり、あるいは名前を聞いたりすると、条件反射で「この商品は信頼できる。」、「この商品は絶対に欲しい。」、「この会社は裏切らない。」、そういったものが条件反射で浮かんでくる。それがブランドというふうに言われております。宮坂さんのところの「真澄」は、まさにそのブランドだと思えます。

それからその下に青い枠がありまして、枠内の左の上に「イメージからの発信」と「品質からの発信」というのがあります。もちろん、ブランドというからには、良いイメージというのが大前提ですけれども、良いイメージを持って来たら実際に食べたものがまずかったとか、良いイメージを聞いてきたけれどもつまらなかったとか、そういうことになると大変ダメージが大きくて、二度と買ってくれない、二度と来てくれないということになります。このイメージと期待を上回る品質を提供し続ける。これがブランドの一番大事な点というふうに言われております。

水色の中の囲みの三つ。長野県のブランドに繋がる信州らしさとは何だろうと考えたときに、一つ、健康長寿。それから勤勉で教育熱心な県民性。自然の美しさ、環境との共生はもちろんでございます。いずれもしっかりとそれを支える人の営みが長い歴史の中であって、今現在もきちんとしたデータで裏付けられている、そんな三つの指標でございます。

こういったものを表すときに、長野県でたくさんの人とこの長野県で感じる幸せというものを分かち合いたいなということで、どんな言葉がいいかなとみんなでいろいろ考えたわけですが、最終的に「しあわせ信州」というようなキャッチフレーズと、「信州ハート」と呼んでおりますけれども、グリーンを基調にしたロゴマークを策定しました。



ただし、このキャッチフレーズやロゴマークを広めるということは目的ではありません。あくまでも手段でございます。このキャッチフレーズをどこかで見たり、聞いたり、あるいはこの「信州ハート」を見たりしたときに、「長野県に行きたい。住みたい。長野県産の物を買いたい。」、こんなイメージが条件反射で出てくる。そういうふうにすることが最終的な目的でございます。

こんな信州ブランド戦略を持っておりますことをまず簡単にご紹介をさせていただきます。早速、鼎談の方に入らせていただきたいと思います。

鼎談

【観光部長 野池明登】

それではまず、宮坂さんにお尋ねをしたいわけでございますけれども、信州らしさと言いますか、他の県にはない長野県ならではの魅力、宮坂さんのお取組の「セラ真澄」のご紹介も含めてお願いできればと思っております。

【宮坂公美氏】

改めまして、皆様こんばんは。宮坂公美と申します。知事と同じ東京生まれではありますが、もう長野県に住んで四半世紀以上が過ぎました。私は若かったというか、何も知らなかったというか、信州には学生のころからスキーに来たり、夏の山にニッコウキスゲを見に来たり、なんて素敵などころなのだろうと思っていました。夏は、諏訪湖の花火が見事なので、花火が大好きな人間にとっては、「ここは私の住みたい所」なんて、主人の魅力ももちろんあったのですが、まず魅力は温泉、水、それから湖、花火。盛りだくさんの魅力があります。これは外からの見た目でした。

最初に来た年に冬を初めて知りまして、「なんてすごいところなんだろう。」と。東京からわずか 200 キロ離れた信州、諏訪。湖が凍り、「外にあったものが全部凍るから冷蔵庫に入れるのですよ。」なんて義母に言われて「うわあ、すごいところに来ちゃったな。」というのが、やはり正直なところでした。でも、子供を3人育てました。おじいちゃま、おばあちゃまたちが畑を作ってくさっていましたので、ささやかな家庭菜園ですけれども、どこのおうちにもお庭というよりは、ベジタブルガーデニングみたいなところが必ずあって、「ほとんど自給自足かな。」なんて思われることが、ここかしこにありました。ですから、小さな頃から子供たちは、もぎたてのきゅうりを食べ、なすをとり、なすをとると痛いんだなということを感じ、育ってきました。冬はそれこそ、乾物類を食べながら育ってきたわけです。

そこで 18 年前、お酒は、メーカーとしていい酒を造って売ればよかった時代だったので、それだけではこれから日本酒のイメージは皆様に伝わらないだろう、ということで、「和やかな食卓」というテーマで、真澄の「セラ真澄」というショップを作りました。これは、一つはやはり、「真澄って何?」「お酒造っているだけじゃなくて、わあ、すごい、こんな食品も置いてある。」「こんな陶芸家の、木工家のいろんな素敵な作品にここに来れば出会えるな、すごいな。」と、思っていただけのような、ある意味、先ほどおっしゃった文化的な生活に、日常に沿ったお酒でありたいと思いましたので、そういったショップを作ったのがきっかけです。

最近では世界中からお客様がいらっしゃいます。一昨日は、うちの酒を扱っていただいているイスラエルからお客様が来ました。そこで私どものショップにあるいろんな器を見て、「いやあ、日本酒ってすごいですね。こんな器でも飲むんですか。こんなふうに温めても飲むんですか。」というような話がそこで決まって出てきます。長野県内で作られている椎茸だとか、いろんなものをちょこちょこっと置いているのですが、そういうようなものも、みなさんにとっては魅力的であるというような感じですかね。

【観光部長 野池明登】

ありがとうございました。

それでは、今のお話も踏まえて、知事の考えている信州らしさ、長野県の素晴らしさをご紹介いただければ。

【長野県知事 阿部守一】

宮坂さんのお話の中の「和やかな食卓」は、先ほどのお酒を売ってもうけようという話だけではない。理念というか目標がある中で真澄が世界にどんどん配信されているのだなということが、改めてお話を伺って感じました。信州らしさはいろいろあると思うのですが、先ほども景観の話だとか、環境の話だとかしました。これは、もちろん長野県はすごく優れているというふうに思っているし、よく私いろんなところで、「夜、星を見ているだけじゃなくて人工衛星だって見えちゃうんだぜ。」と自慢していますけれども、そんなこと東京ではありえないです。

それだけじゃなくて、人の営み。先ほど、教育県だったという話をしましたけど、今、私が知事としていろんなところに行くと、今でも、「長野は、教育県ですよ。」と言われることと、それから「健康長寿ですよ。」と、知事会に行っても、健康長寿は他の知事はうらやましがるし、海外に行っても、向こうは長野県の知事が来るといって、長野県はどういうところだって調べるので、必ず「どうして健康なのですか。」と聞かれるわけですよ。

私は自然とか環境ももちろん優れているのだけど、私は長野県の素晴らしさというのは、実は人の営みだと思っています。健康長寿も、先ほど言ったように、何もせず健康長寿になったわけじゃなくて、一人ひとりの取組の成果ですし、教育なんて、まさに人の営みそのものであるわけですから。いろんな県で仕事していたことはありますけれども、こういう教育県とか、健康長寿県とか人がやることで評価される県は、ほとんどないですよ。どこかの県は、酒飲みの県とかそういうのはあるけども、あまりないですよ。海がきれいですねとか語られるけども、「教育熱心ですね。」とか「健康に留意して健康長寿ですね。」と言われるところが、やはり長野県の強みなので、是非このブランドの話も単に物とか場所とかだけじゃなくて、人とセットで発信することが、実は長野県らしさになるのではないかなと思っています。

【宮坂公美氏】

長野県の方は、早起きですよ。私も最初驚いたのですけれども、夜が明けるところにパチパチパチと音がすると、何かと思ったらおばあさまが一生懸命、木にはさみを入れていたり、お年寄りでも、教育も「今日、行くところ」、教養も「今日、用事がある」。これが、長寿県の秘訣ではないか。だから、勉強するだけとか、知識があるだけではなくて、やはり常に何か自分が人の役に立つことがあるというのが、長野県の良さではないかと思えますね。

【長野県知事 阿部守一】

そうですね。長野県で最初に驚いたというか、感動したのは、お年寄りの人たちがみんな図書館で熱心に勉強している。本を読んでいるのは確かに読んでいるのですが、読んでいるだけじゃなくて、メモをしながら、いかにも学んでいる人たちが多くいますよね。あと、昔、田中県政の時、車座集会と呼んでいたけど、みなさん理路整然と発表されるのですよね。いわゆる学校のお勉強は、「もう、教育県ではないのではないか。」と言われても仕方ない状況になっていて、それは何とかしないといけないのですが、地域の風土としては例えば、公民館活動だったり、社会教育だったり、そういうのは非常に優れた県でもあるし、一人ひとりの行動とか営みを見ていると、まだ実は教育県ではないとあっさり旗を降ろす必要もないのではないかなというふうに思っています。

【観光部長 野池明登】

長野県の素晴らしさ、いろんな切り口から出ましたが、会場の皆さんの感覚をここで聞かせていただければと思っております。皆さんのお手元に赤の紙と、それと緑の紙があります。私がこれからお尋ねをしますので、このどちらかをあげていただければと思っております。

まず、この信州に生まれたこと、信州で育ったこと、あるいは信州に移り住んだこと、「これ良かったなあ。」と、あるいは「誇りに思う。」という方はこの緑色の紙を上げてください。「そうは思わない、自分の感覚は少し違うんだ。」というような方がいらっしゃいましたら、赤の方を上げてみてください。それでは、どうぞ、お願いします。これすごいですね。99.9%くらいですかね。今、会場に200人くらいいますけれども、ほぼ、すべての方が緑の紙でございました。

もう一つ、合わせてお願いしたいのですけれども、この長野県に住んでいることの素晴らしさが十分に外に伝わっているかどうか。「十分に外に伝わっている。」と思う方は緑、「残念ながらそういう状況ではない。そうは思わない。」という方は赤を上げてください。それではお願いします。会場の皆さんは、非常に赤が目立った状況でした。少し残念ですね。宮坂さんどうですかね、半分以上が赤でしたかね。

【宮坂公美氏】

驚きました。そうなのですか。私もお店をやっていると思うのですけれども、お客様は「いやあ、いいところですね。素晴らしいですね。」と言いながらお入りになってらっしゃるのですが、諏訪の方というか、長野県人は、ものすごくシャイというか、「いやあ、そんなことないですよ、そんな大した町じゃないですよ。」なんて返してしまいますね。そうではなくて、「ほめていただいたのだからもう少し、そうなのです、良いところなのです、温泉がありますって何で言わないの。」と私もスタッフに言うのですけれども、やはり、そういう県民性があるのですかね。

謙虚ですね。でも自信持って是非、皆さん、「本当に良いところなのです、今

度こちら行ってください、須坂行ってください、温泉に行ってください。」と、少し自慢して、皆さんの町を、長野県の中のいろんな町を回っていただくようにほめていただきたいと思います。多分、県外に出られて生活したことある方は自慢できると思います。

【観光部長 野池明登】

県民性からいうと、長野県は、やはり少し控えめなのですかね。実は先ほどのブランド戦略の中で、「しあわせ信州」の他に県民向けのスローガンということで、是非県民の皆さん一緒にこんなスローガンで大いに盛り上げていきましょうというのがございます。それは「掘り起こそう、足元の価値。伝えよう、信州から世界へ。」これが、県民運動のスローガンということでございます。

たまたま、観光部長ということで、「長野県、信州観光も最近厳しくて。」という話を他県の人にするとですね、「長野県さん、何をおっしゃっているのですか。」と、「何を贅沢なことをおっしゃっているのですか。」と、「あんなにたくさん素材があって。」というふうにお叱りを受けることがあるのです。長野県には、素材がたくさんあって、しかも足元に磨けば光る宝がいっぱいあるというような状況なのですが、宮坂さんとしては、磨けば光る信州の宝物としてどんなものがありますでしょうか。

【宮坂公美氏】

我が家は遊び人でもあるので、週末になると冬は薪ストーブを焚いて、お客様を呼んで楽しんで食卓を囲みますし、夏は、このシーズンは先週も、折りたたみのカヌーを車に積んで、万水川（よろずいがわ）から犀川に抜ける道を、ちょうど「おひさま」のテレビでやった風車のあたりをずっと通過していくのですけれども、本当に信州に暮らして素晴らしいと思います。それから、私どもの住んでいる諏訪湖ですね。たまたまうちの自宅の横に中門川（なかもんがわ）という川が流れています。信州は川がたくさん流れていますので、いろいろな川があると思いますけれど、そういうところをカヌーで行くといいですね。主人はまず、土曜日曜の朝はカヤックで川のゴミ拾いをやっていて、翌日も二人でカヌーでまたゴミ拾いをするなんてことをやるのですけれども。

寒いときは、カヌーはできないので、自転車で諏訪湖を一周したり、「もっと遊べるサイクリングコースがあるといいのになあ。」「八ヶ岳のふもとにあるといいのになあ。」なんてことを思いつつ。最近、自転車を積んで若者が電車に乗ったり、今日も見かけましたけど、駅のプラットフォームで自転車を担ぎながらやって来る若者がいました。お店に自転車をはめる器具を置いときますと、最近自転車でも方も多くなってきました。そういう楽しみ方も、信州のサイクリングとか、遊びの楽しみ方ってあちこち探せばあるのではないかと思いますね。

【観光部長 野池明登】

諏訪湖を自転車で湖周を走ることは、特別なことではないですよ。

【宮坂公美氏】

はい、もう一時間くらいで。でも、少しずつ遊びながら、お水飲みながら回っていると、楽しいです。発見がありますね。

【観光部長 野池明登】

先ほどの宮坂さんのお話の中にも、「日常の中に」というキーワードがあった気がするのですが。知事、いかがですかね。日常の中にいろいろな発見とか宝がある。

【長野県知事 阿部守一】

ブランド戦略を考えていく上で、日々の暮らし、先ほどの「しあわせ信州創造プラン」でも「確かな暮らし」と暮らしを前面に出しています。あと、観光でも、観光地域づくり。要するに観光も暮らしの中で、自分たちの暮らしが楽しくないのに、あたかも楽しいように装っても、人なんか絶対来ないわけだから。宮坂さんのお宅はその中でも先進的にエンjoyされているなと思ったりしましたが、我々自身の暮らし方、ライフスタイルに実はいろいろな価値があり、魅力があると私は思っています。先ほどの薪ストーブの話でも、都会で薪ストーブの暮らしなんて、こんな贅沢な暮らしはないわけでありまして、そういう意味では、長野県には次の社会が求めるものを実現しやすい環境というのがないと私は思っています。そういう暮らしの良さ自体を我々がもっと高めていく。それがまさに、確かな暮らしで中期計画が「しあわせ信州創造プラン」でやらなければいけないことですが、その暮らし自体をやはり発信をしていくことが、実は都会で疲れた人たちにとっては、とてつもなく魅力になっていくと思っています。だから、移住したい人の数がナンバーワンなのが長野県だというふうに思っています。

【観光部長 野池明登】

今、上田の武石に「信州せいしゅん村」という取組がありまして、国内あるいは台湾の方からたくさんの子供たちがくるのですけれども、当たり前前の農村の、当たり前前の暮らし。これが十分魅力的なのですね。雨が降ったら農作業をできないわけですが、その時はうちの中で、農家の暮らしを、農家の普通のライフスタイルを楽しむ。それが十分魅力であって、旅行商品でも成り立つという。将来の日本という少し大げさかもしれませんが、信州の日常というのが実は都会から見たりすると価値があるものなんだと、そんなふうに思いました。

今日座っている椅子は、芸術作品じゃなくて、実用品なのです。ご紹介いただけますか。

【宮坂公美氏】

はい。私が大好きな前田さんのデザインです。彼は実は



鎌倉の方から、お父様と一緒に工芸のために信州に移り住んだ方なのですけれども、私がショップをやっているということでいろんな方たちが来てくださって、いろんな出会いがある中で、大作さんのお父様と、かれこれもう 15 年くらい前ですかね、お店に来ていただいて、それから知り合いになりました。いろいろと活動なさっているのですけれども、彼の活動が今花開いていらっしゃるアトリエ・エムフォオ株式会社の前田大作さんです。

【観光部長 野池明登】

前田さん、一言あればお願いします。

【前田大作氏】

今、ご紹介いただきました、私で 4 代目になるのですけれども、松本市で木工を営んでおります前田と申します。僕だけではなくて、松本平近郊にはたくさんの方の木工の方がいらっしゃるのですけれども、そういった木工家たちがもっとつながって地域で物が作れたらいいなという取組の第一号の僕がデザインした椅子とテーブルを今日はお使いいただけるということで、持ってまいりました。このような機会をいただいて、本当にありがとうございます。

せっかくなので、少しだけ信州のことを。僕も仕事柄、ブランドのこと、それから信州と地域の事、その営みのことなんかをすごく日々考えるのですけれども、ブランドにとって一番大事なことは、人にどう見られているかということではなくて、自分がどれだけ自分のことを好きになれて、誇りを持って、信念を曲げずに物づくりに、私の場合は物づくりなので、取り組めるかなということだと思いのですね。その時に、大事になってくることは、よその物を求めたり、自分ないものをねだったりするのではなくて、まず自分の身の回りにある物をどれだけ生かせるかということが、最終的にはそのブランドの信用力、もっと大きなところでは豊かさにつながると思っているのですね。

信州には、この概要版の中にもありましたけども、森林がすごく多くあって、残念なことにまだそれが生かされているという状況にはなっていないのですけれども、カラマツという木がたくさん生えている土地柄、そんなにカラマツがいい木じゃないと言われているご時勢であっても、生えているのだから使おうというところをすごく大事に考えてやったりしています。なにかそういうところが、他の県の方から見た時に、「信州の中で楽しそうに物作っているな。あの中で海外から材木を輸入するのではなくて、山に生えている木を切ってきて、自分たちでコツコツやっているな。」という暮らしが、結果的にすごく豊かに見えてくることがあればいいな、と思っています。そんなところを、今日また皆さんの話を伺いながら続けていきたいなと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

【観光部長 野池明登】

とってもぬくもりのある椅子ですね。

【宮坂公美氏】

そうですね。



【観光部長 野池明登】

今日はこちらの方にも、いろいろ展示をしてあるのですが、こちらの絹の着物・銘仙(めいせん。明治以降、昭和初期まで多くの女性に利用された絹織物の一種。鮮やかな色や、斬新な柄が特徴的で、比較的手頃に入りの着物として普段使いに用いられた。)なのでございます。須坂クラシック美術館からお借りしたものでございます。虫干しの時期に行きますと、見事な作品が展示されております。それから、みなさんに向かって右側に、これも地元、須坂の花でございます。トルコキキョウですとか、ユーカリですとか、セラムですとか、大変素晴らしい季節の花。それからこちらはですね、飯山からお借りしてありますけれども、手すき内山和紙の明かりでございます。大変温かい空間を作ってもらっておりますけれども、こんな長野県のブランドも本日この会場で、ご紹介をさせていただければと思っております。今日は地元の須坂市の三木市長さんが来られておりますので、もしよろしければ、三木市長さんから須坂市のブランド戦略というか、展開を少しご紹介していただければ幸いです。

【須坂市長 三木正夫氏】

こんばんは。ただいまご紹介いただきました、須坂市長の三木です。今日は須坂市でこのような催しを開催してもらいまして、ありがとうございます。とかく、大きな市で開催されることが多いのですが、こういう、小さな須坂で開催していただくというのは、大変ありがたく思っています。そして、先ほどからいろんなお話をお聞きしていただきまして、大変参考になりました。ありがとうございます。宮坂さんも遠くからいらしてありがとうございます。

先ほど、信州ブランド戦略、野池観光部長の方から信州というイメージと個の

ブランドイメージとの相関関係、相乗効果というお話が出ましたけれども、須坂の場合には個々のブランドはいいものがたくさんあるのですけれども、それが須坂という名前で行かないということが一番の課題であると思っています。北アルプスに槍ヶ岳とかいろんな名前がありまして、それを統括して北アルプスという名前になっていますけども、須坂は個々にはたくさんありますけど、須坂という名前を聞いて、どこだかということとはなかなか分からない。今やらなければならないのは、先ほどお話にありました、須坂というイメージと個々のいいものと一緒にするのができればいいなと思っています。

そして、少し須坂のことを PR させていただきますと、先ほど知事の方から人の営みというお話が出ましたが、私は人の営みが一番大切ではないかなと思っています。それから、教育県と言われていたということでもありますけれども、実際今でも、私は教育県であると思っています。確かに進学率であるとか、そういうのが高くなれば高くなった方が低いよりはいいですけれども、それよりは人に対する思いやりだとか、生きる力、そういうものが大切ではないかなと思っています。特に今のような社会になって、学力が人のためでなく、自分のためになっている世の中で果たしていいのかどうなのか。自分が向上するとともに、人が向上するような、教育というのが大事ではないかなと私は思っています。

そういう面では、須坂では「信州・須坂の農業小学校」というのをやっておりますが、これは子供たちが生きる力と、一緒に作業することによって共同の大切さを知るとのことだと思います。後ろの銘仙、須坂クラシック美術館についてご紹介申し上げます。実はこの須坂クラシック美術館の銘仙は、ロンドンとハワイで展示会を行いました。外国人にもものすごく人気がありました。つまり、日本人よりも外国の人の方が日本の良さがよく分かるということでもあります。そして、善光寺のお上人さんだとか、東山魁夷先生の奥様のすみ夫人も須坂クラシック美術館に来られまして、非常に長い間見ていただきました。そしてなお、お上人さんは須坂クラシック美術館で組み紐展を開催していただきました。まさに寺子屋のようなことをやっていただいたのですが、先ほどお話にありました、足元の価値を見つめて情報発信をしていくことが大切ではないかなと思っています。情報発信の不足ということで多くの方が手が上がったということでもありますけれども、まだまだ自分たちで情報発信をしていかなければいけないという思いが、それぞれの人にあるということは大変いいことだと思います。

もう一つ、須坂、小布施・高山も含めまして、大事なのは進取の気性があるということではないかなと思っています。農産物を作っても、全国でも有数の農産物ができます。私も昨年、桃だとか、ぶどうだとか、りんごを知人に送っておりますけれども、こんなおいしい果物を食べたことがないということを言われます。そういうことは私は、信州のブランド化にとって重要だと思います。

ただ、一つだけお願いですけれども、これは私どもも責任ありますけれども、一つの市とか町や村ではなく、連携してやっていくことが大事ではないかなと思います。先ほど前田さんが、同じ木工の工芸家としてもう少し連携がというお話が出ましたが、これも観光だとかさまざまな面で、市町村と県が、市町村同士が連

携していくことがこれからの長野県づくりには大切ではないかなと思っております。長くなりましたけども、重ねて、このような素晴らしい機会を当須高（すこう）地区で開催していただきましたことに対しまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。

【観光部長 野池明登】

今日は小布施の市村町長さん、高山の久保田村長さんも見えられております。また後程、ご発言をいただければ大変ありがたいと思っております。今、三木市長さんから、かえってこういう和の物は、外国の方がの方が受けるとありました。長野県にいと当たり前なのだけれども、びっくりされたりですね、感心されたり、どうでしょうか。県外の方が来られた時に、こんなものがこんなに受けるのか、そんなギャップありますか。

【宮坂公美氏】

あります。あります。やはり、先ほどおっしゃったように、りんごを食べてまじりつくりなさいますね。ボケりんごとか、それが当たり前の方がほとんどなのです、県外の方は。皆さん多分ご存じないと思いますけど。やはり、酒蔵仲間でいろんな酒屋が来るのですが、ちょうどりんごの時期にいらして、りんご畑に連れて行くと、「これはりんごじゃない。」とおっしゃるのですね。「何で？」と言うと、「もっとボケたりんごを今まで食べてきて、これがりんご？」とおっしゃるぐらいなのですよね。暮らしの中で、日常、畑に行くと、春なんかうちは垣根がウコギなのですけど、ウコギを朝摘みながら、それを朝ごはんに入れて出すと、「うわー、食べられるんだ、垣根なのに、とげがあるのに」などとおっしゃるのですが、そういう日常の暮らしがとても、楽しめる信州。それが私も素晴らしいなと思えますね。

【観光部長 野池明登】

ここで、実は映像を用意しております。Iターンですとか、Uターンですとか、移住ですとか二地域居住ですとか、外から見て長野県がどんなふう映っているのかなってのを聞いてまいりました。4人、ご紹介させていただきます。須坂の方が3人、長野市信更町の方が1人ということでございます。

（映像資料の要旨）

- 1 涼しいし、天気がとてもよいです。また、非常に整然としたところで、人柄はジェントルマンですね。標高の高い山でも、朝決めればその日に登れます。これは、信州の魅力のひとつで、実はとても贅沢なことですが、長野県の人たちはそれに気付いていないと思います。普段の生活の中にあるものが魅力的だと思います。そういうものをもっと発信できればよいと思っています。

- 2 気象庁のデータを取り寄せたところ、北信はブドウ栽培に関しては日本の最適地であると分かりました。それで、故郷である須坂に戻って来ました。広く知ってもらわなければ、作っているワインも売れないと思って、英語のブログも始めました。「毎日楽しみにしているよ。」という便りもあって、励みになっています。ブランドとは、それを持っていて楽しくなる、安心感があるということだと思います。信州の魅力は自然と人の営みの中で築かれているので、ここにいると安心感があります。須坂の魅力を発信するためには、ワインに関係して、チーズやパンなどを手がける人が出てきてくれたら楽しいと思っています。

- 3 国際結婚をきっかけに、夫婦でゲストハウスを始めました。主に海外からのバックパッカーや日本人でも一人旅をする人に利用してもらっています。宿には交流スペースや薪ストーブを置き、古い屏風や神棚などが人気です。お客さんには街に出て街を楽しんで欲しいと思います。どこを照会しても喜んで帰ってくるのは、須坂の人たちに街ぐるみで良い「おもてなし」をしてもらっているからだと思います。これは、みんな顔見知りのような小さな街だからできることで、それが須坂の魅力です。

- 4 長野に移り住む前と住んでからの魅力は、かなり変わりました。長野は食べ物の種類がとても多いです。これほどおいしいものが作られているという認識は住むまではありませんでした。良いものがたくさんあるのに、信州のブランド発信力は弱くて、もったいないと感じています。長野県はほとんどの農作物において全国有数の生産量なのに、それを認識している県民が少ないのではないかと感じています。長野の魅力を伝えるためには、とにかく来て見てもらうのが一番いいと思います。自分たちのやれることから発信してみようということをモットーにしています。

【観光部長 野池明登】

最後に象徴的に、「長野県民自体が知らないのではないか、もったいない。」なんていう言葉が出ましたけれども、知事、いかがですかね。

【長野県知事 阿部守一】

須坂市は、いいところだなと改めて思いました。三木市長がジェントルマンだから、皆さんジェントルマンなのかもしれないなと思いましたけれども。先ほど「もったいない。」という話がありました。私は「長野県は、いいものがあるのに、もったいない。」を通り越して悔しいのですよね。悔しい。

他の県では、ゆるキャラとか、あるいは少しくだけた発信方法をやっていますが、先ほどの地域ブランド力の話でも、信州というブランドはもともと、非常にブランド力があると思っていて、信州というのは非常にいいイメージなんです。けれども、私がいろんなところで言ったのは、それ食いつぶしてきているな

と。食いつぶしてきているというのは、物事なんでもそうですけど、新しい価値とか新しい魅力を信州に付与していかないと、今まで確かに信州とすごくいいブランドだったと思うのですけれども、他の地域がどんどん頑張ったり、他がいろんな発信をしていく中で、やはり相対的に下がってきているなというのはデータのにも表れているし、私の皮膚感覚でもそうです。

だけど、先ほど出てきた方たちも言っていたように、本当にいいものは結構持っているわけで、もう一回、それこそ先ほどのスローガンのように、我々、足元にある良さとか長野県の強みというのをしっかりと見つめ直して、掘り出して、それを発信していくというプロセスを行政として行っていきたいと思いますし、先ほどの「しあわせ信州創造プラン」とともに、行政だけじゃなくて、是非県民の皆さんと一緒に取組んでいきたいというのが今度の信州ブランド戦略であります。

先ほど三木市長の話にありましたけど、長野県が心していかないといけないなと思っていることの一つがバラバラ感。例えば、これ発信の仕方もバラバラなのですよ。例えば、私が横浜市で副市長をやっていた時に、横浜の関内の駅の大勢の人が通るところに、大体いつも長野県のどっかのポスターが貼ってありました。だけど、例えば固有の名前を言っただけではいけないかもしれないけど、軽井沢は軽井沢、白馬は白馬とかね、諏訪は諏訪とかね。長野県をよく知っている人たちは、軽井沢まで行ったら、もう少し足を伸ばしてこっちまで行こうとかね、いう見方をできるけども、全然知らない人に発信する時に、私から見ていると、長野県の資源がすごくバラバラに発信されていて、もったいないなと、残念だなというふうに思うことが結構あったのです。

例えば、野沢温泉も横浜の西口に年中来て宣伝してくれていましたけど、野沢温泉は野沢温泉だけという感じで、野沢温泉から少し足をのばせば飯山なのに。今は信越自然郷ということまでまとまってやっていこうということを取り組んでおられますけれども、どうしてもバラバラ感があるなというのを感じていました。先ほど三木市長がおっしゃっていたように、やはり「信州ブランド」というのは、もちろん個々の個性をつぶしてはいけませんよね。だから、トヨタ自動車の固有名詞を使ってはいけません。マツダでも日産でもいいですけど、トヨタ自動車だったらプリウスはプリウスで環境に配慮したいいい車ですよ、というふうにやらなければいけないし、アルファードはアルファードでもっと大勢で乗れますよというような特色を出さなければいけない。長野県は個性が強い地域があることが強みの一つなので、そこを潰してはいけません。そこは維持しながら、そういう地域全体との信頼感とか安心感というものを、個々の車種の信頼感や安心感がセットになっているのと同じように、須坂は須坂、長野市は長野市、諏訪は諏訪で、個性を持ちながらいいものを育てる。だけど、総体としての信州も、やはり安心できるよね、信頼できる地域だよと、そういうことを地域ブランドとして目指さなければいけないだろうなというふうに思っています。

これは県だけがやってもできない話なので、市町村の皆さんとか地域の皆さんとか企業の皆さんと是非一緒にやっていきたい。先ほど野池観光部長から申

し上げたように、これは単に宣伝するっていう話だけじゃなくて、実態も変えなければいけないと思っています。せっかくいい観光地なのに、来てもらったのがっかりというのは、それは確実にブランド力を下げます。イメージと実態がセットでなければ、どんどんブランド力が下がる一方になってしまいますから、是非この実態を上げていく。例えば、これからおもてなしの話を県全体で頑張っていきたいと思えますけども、やはり来てみたら思っていた以上にいいところだよねというふうに思えるような実質のところを変えていかなければいけないのがブランド戦略だということで、是非皆さんと一緒にやっていきたいと思えます。よろしく願いいたします。

【観光部長 野池明登】

それではここで、ブランドと言えば、「小布施町」というのがすぐ出てくるのですけれども。あと、「ワインと長寿の里・高山村」。これも大変今浸透していますけれども、市村町長さんと久保田村長さんから一言ずつコメントをいただきたいと思えます。

【小布施町長 市村良三】

今日は素敵なタウンミーティングを須坂で開いていただきありがとうございます。宮坂さん、お久しぶりでございました。素晴らしいお話をいただき、ありがとうございます。

今知事さんも、それから、三木市長さんも、先ほど前田さんもおっしゃいましたけれども、個別で戦ってはだめだということで、是非連携ということ念頭に置きながら皆さんとともにやっていけたらと思えます。よろしくどうぞ願います。

【高山村長 久保田勝士】

高山村長の久保田でございますが、今日は大変素晴らしいミーティング、お聞かせいただきまして本当にありがとうございます。

先ほど知事さんの方からも、この5か年計画といいますか、県のしあわせ信州の創造、こういうこととお話をお聞きしたのですが、この中でやはり「確かな暮らしが営まれる美しい信州」、まさにこれに尽きるのではないか、こんなふうに思っております。これからは、非常に都市とこの地方というのは共存共栄していかなければならないのではないかと、そんなふうに思っております。そういった中で、この中山間地域は、もてる持ち味を十分生かして役割を果たしていかなければいけない。そういうようなことから、高山村の場合には、自然というものを十分生かしながらいくという、こういうことが健康長寿に、この自然と人が共生するという中で生かされてきた積み上げが現在にあるのではないかなと、そんなふうに思っております。そしてまた、これからの一つの営みという、こういう中で「生きる」、そういったものもなければならぬ。これには産業が非常に大切なわけでありますが、地の利を生かして、世界へ通ずるようなワインづくり

ができればと、こういうようなことで、まだまだ先は長いわけではありますが、そんな取組をしながら村民の皆さんと上を向いて歩いていきたいと、こんなふうに思っておるところでございます。そうした中で、このアンチエンジシングというこの健康長寿。こういう中では、医学博士で寿命制御遺伝子の研究で有名な白澤卓二先生もおっしゃっておられるのですが、運動、そしてまた、この食事、そして、生き甲斐、こういうことであります。産業と文化が調和のとれた村づくりができればなど。そして、都会の皆さんがいつお出でをいただいても、こういったところで心を癒していただけるような、そんな村づくりを村民の皆さんと一生懸命やっていたら、それがすべて備えているのがこの須高地域ではないかなと、こんなふうに思います。持ち味をそれぞれ生かしていければ、すばらしい須高地域になると、こんなふうに思っておるところでございます。このすばらしい「しあわせ信州の創造」について、おおいにこれからの5か年の中で期待申し上げます。よろしくご指導お願いしたいと思います。今日はどうも本当にありがとうございます。

【観光部長 野池明登】

宮坂さん、宮坂さんのお取組を聞いていて、皆さん多分すばらしいなと思っ
ているのですが、ごく普通の暮らしをしているごく普通の私たちがブランドの発信
なんてできるのかなと、そんな疑問もあるのではないかなと思っています。ブラ
ンドの発信については、どう思われますか。

【宮坂公美氏】

先ほどカヌーだとか薪ストーブなんて言いましたけども、「あら、公美さんだか
らそんな。」と思うかもしれませんが、私は主人に宝石をねだったこともなく、
光り物は小鱈（こはだ）だけということで、お寿司屋さんには連れて行ってもら
いますけれども、着物も全部これ母や祖母のものなのですね。私たちが働いて投
資ができるのは、贅沢をするわけではなく、やはり子供たちに投資をしているの
ですね。うちの子供たちが高校の時に1年間だけ高校 AFS という留学をしていま
して、その代わり交換留学なので受け入れなければいけないのです。ですから、
ニュージーランドからドイツから1年間来るわけですよ。うちは特別そんな大き
なブランド持っているわけではないです。家庭での食事も決して贅沢ではないで
す。本当に信州味噌でお味噌汁、季節の野菜だとかのお味噌汁と炊きたてのご飯
とお漬物、それと畑でとれたもの。あとは物々交換でお酒を、意外と新潟に送
ると新潟のお魚が送られてきたり、山形の方にお酒を送るとお肉が送られてきた
り、そんなことで生活しているようなもので。本当に食はおいしいものを作って
あげれば、贅沢じゃなくても、みんな、にこっと笑いますし、また戻って来ます。
ですから、留学する子供たちも、また毎年のようにニュージーランドからドイツ
から来ます。ドイツから来た子は、先ほど前田さんおっしゃったように木の仕事
をしたいと言って、半年間、毎日こもって木を切る仕事をしにインターシップで
来ました。やはりそうやって食でつながる。だから、決して各市町村が大きな事

業をしなくても、おもてなしでその土地の地野菜で、お母さんたちとか奥様たちが作っているお料理でおもてなしをすれば、そんなフランス料理だとか、ここへ来てイタリア料理だとか、ここへ来て鮪を食べようなんて人はいないと思います。今だったら、ていざなす(信州の伝統野菜に指定されている米なす型の大型なす。大きなものは1キログラム近くになる。)の焼き味噌とか、おなすの油炒めとか、そういうようなものがみんな食べたいのだろうな、それがきつとおもてなしになり、ブランドになり、信州またもう1回来たいなということになる。すばらしいものはいっぱいあるわけですから、あとは食でつなげていくのがいいと思います。

【観光部長 野池明登】

おいしい食べ物は世界共通語です。

【宮坂公美氏】

そうですね。知事、「しあわせ」は、あるコマーシャルじゃないですけど、手を合わせるっていうのはしあわせだそうです。手を合わせて「いただきます」、それから「ごちそうさま。」というのは日本人だけのようです。ですから、とてもいいネーミングだと思います。

【長野県知事 阿部守一】

ありがとうございます。宮坂家の食卓、フェイスブックでお友達になっているのでよく見させていただいて、いつもおいしそうだなと思って拝見させてもらっていますけども、「しあわせ」には結構主観的な部分もあるので、行政として「しあわせ信州」というのでいいかどうかと、私は少し悩んだところも少しありました。だけど、日本総研の幸福度ランキングでも堂々第1位ですし、やはり私は行政の目指すことっていうのは、何か機能的な部分だけじゃなくて、やはり気持ちの豊かさのところまで考えていかなければいけない時代だと思うのです。行政も、箱を作ったり、道路作ったりということももちろんやらなければいけないこともありますけども、それだけじゃなくて、やはり心豊かに暮らしていただくためには何が必要なのかということを考えていかなければいけない時代だと思っているので、あえてこの「しあわせ信州」ということを新しい5か年計画の目標にもして、ブランド戦略の核となる概念としても出させていただいています。是非「しあわせ信州」の大きな傘の中で、いろいろなものを発信していただけるとありがたいなど。是非「しあわせ信州」の真澄という形で、真澄の「しあわせ信州」でも構わないですけど、是非少しそういうところもコラボレーションしていただければありがたいなと思います。

会場との意見交換

【観光部長 野池明登】

それではここで、会場の皆さんから、信州らしさ、すばらしさ、ブランド、そんなことに関わって、発言したいという方いらっしゃいましたら是非お願いしたいと思います。(以下、観光部長の進行発言を一部省略します。)

【須坂市健康福祉部長 小林芳彦氏】

信州ブランドの一つとして、健康長寿のお話が先ほどからずっと出ていましたけれども、私も市の健康福祉部長ということでそれなりに関連をしております。知事の発言にもありましたが、地域全体の安心感という意味で関連して、エンディングノートとリビングウィルについて少し発言をしたいというふうに思っています。長野県は男女ともに全国一番の長寿県であります。ただ長寿であるばかりでなく、健康長寿ということでもあります。これは本当に信州ブランドと言ってよいと思います。いろいろな要因がありますが、須坂にもお見えになっていきますけれども、保健指導員さんの視察も大変多いという状況であります。しかし、誰もがそのしあわせを感じて長寿を全うしたいと願うのですけれども、病気等によって寝たきりになった時、自分の最期をどう迎えるのか、延命を望むのかどうか家族にも問われる時が訪れると思います。須坂市では、自分の人生を振り返って、自分らしい最期を迎えるためにエンディングノートを作って、市民の皆さんに広げていきたいというふうに考えています。作成には、県の元気づくり支援金をいただきました。ありがとうございます。

また、自分が受ける終末医療についての要望と、自分の最期について意思表示するリビングウィルについて、須坂病院の先生をはじめ医療機関の関係者の皆さんや、須高3市町村の皆さん、福祉施設従事者の皆さんの協力のもと、一つの冊子を作りました。信濃毎日新聞さんに取り上げていただきましたら、市内はもちろん、県内のあちこちから問い合わせを本当に多くいただいている状況であります。須坂病院にもいくつかの病院から問い合わせをいただいていると伺っています。長野県は長寿県でありますけれども、こうしたリビングウィルについても、県をあげて取り組んでいく必要があるというふうに感じています。

さらにこれはお願いですけれども、長野県の地域医療再生計画ということで、在宅診療推進のために須高も頑張っておりますが、県では基金を創設して取り組むことをされています。是非この須高地区の取組にもご支援をお願いをしたいというふうに思っています。

【参加者1】

皆さん既にご承知であります。平成27年度から須坂新校、須坂創成高校がスタートをするわけでありましてけれども、その点について、実は2点ほど申し上げたいと思います。先ほど知事さんから、人づくり、そしてまた、教育はこれから力を入れていきたい、というようなお話をいただいておりますので、そんな視点に立って少しお話を申し上げたいと思います。

その前に、私の方から今日までのこの須高地域の高校について、いろいろ長野県、そして県教委、合わせて須坂市教育委員会、それから関係者の皆さんに、大

変この新校開校に向けていろいろご努力いただき、ご尽力いただいているわけですが、本当に心からありがたく思っているところでございます。今後ともまたよろしくお願ひしたいと思ひます。

それから、須坂の地域産業を支え、そしてまた、将来を担うスペシャリストの育成、並びにバランスのとれたものづくり王国長野県を育ててほしい。それから、先ほどもお話が出ておりますように、長野県は教育県というふうに言われておりますが、この教育についてさらなる振興を図っていければというふうには思ひます。そのためにも、この地域連携を通じた教育環境っていうものをしっかり大切にしていかなければいけないなというふうには思ひているところでございます。ここ須高地域は歴史的にも地域をあげて人材を育ててきたという教育風土が実はあります。新設される工業科におかれましても、未来を担う人材を地域とそれから産業界あげて、協力していこうということで体制づくりを検討されているところでございます。本当にありがとうございます。そういう観点で、実は工業に加えまして、農業科と商業科ができるわけですが、この有識者、マイスター、あるいはまた大学の教授など、多面的には是非力を借りて授業ができればありがたいかなと考えております。つまり、農・商・工のバランスのとれた専門教育ができれば大変うれしいというふうには思ひます。

それから、もう一つ目ですが、県の教育・子育ての施策基本方向の中でも書いてありますが、教員の資質向上など、教育環境の整備、地域と連携・協力して、開かれた学校づくりの推進というものが示されております。私は昨年実は山形県の、山形県立長井工業高校を視察させていただきました。それから、ある工場を視察させていただいて、その工場の会長さんとお話をさせていただいたのですが、まさに技術は日進月歩であると、そういう中で高校の、特に工業なのですが、最新鋭の機械を設置するのはもちろん大事なことでありますけれども、それを扱う、それを教える指導者なり先生が大事だと。つまり、ソフト面が非常に大事なんだよというお話をいただき、非常に印象に残っているところでございます。私もですね、まさにこの指導者こそが最大の教育環境だというふうには、私は考えているわけでありまして。具体的にその会長さんからのお話ですと、教師や地域の指導者、それから技能者を週2回ぐらい山形大学へ派遣をして、一つ上の勉強をしていただいたらどうかというようなことを提案をしていきたい、というようなお話をいただきました。我が須坂新校においても、是非大学連携等も視野に入れていただいて、そんな取組をしていただけないかなというようなことを考えております。須坂新校、まさに新しい時代を切り開いてですね、産業や文化を作り出す人材の育成を目指して、全国一輝く高校を私は地域とともに築いていければありがたいな、こんな願ひでござひます。

【参加者2】

教師をやっています。私は、学級崩壊で教師の仕事をスタートしました。その後、自分が正しい方向で勉強したらクラスがよくなり、そして、自分に反抗した子どももすごくとってもいい子になりました。結局教師がきちっと対応すれば、どの

子もいい子になるという経験をその時にしました。例えば、跳び箱でしたら、跳べない子たちを集めて1時間授業をすれば、どの子も跳べるようになるというふうに思っています。私のクラスは、1年生というせいもあるのですが、昨日だったら、引き算テストも平均点 98 点です。宿題は出していません。きちんと教えれば、正しいやり方をすれば、どの子もできるようになるのです。そういったことを当り前にしていかなければいけないというふうに思っているが、教育現場の中でなかなか自分の主張もうまく通せないでいて、知事からのお話がありましたけれども、教育改革が遅れている状態です。なんとかやっていきたいなというふうに思っています。

一つ知事にお礼を言いたいことがありまして、6月21日の県のホームページに「発達支援を専門的に行う学びの場づくりに関する授業」ということで、翔和学園という東京の中野にある学校を長野に誘致して、これから進めていくということが報告でありました。発達障害というと、一般の方は誤解があるのですが、普通の子です。文科省の数値では6%です。日本教育技術学会の最新の数値では10人に1人です。ですから、どの教室にもいて、席に着くのが苦手とか話を聞くのが苦手だとか、少しルールを守るのが苦手だとか、そういった子たちです。偉大な人たちも多くて、坂本龍馬だとかエジソンだとかアインシュタインだとか、天才はほとんどそういった形なのです。その子たちが、こちらの対応が悪いがために傷ついて、学校の中でうまくいかないでいます。それは我々に一番責任があるのですが、それで日本中の本当に傷ついた子たちが、最後に行っていた学校が東京にある、先ほど言った翔和学園なのです。翔和学園は、日本の教育界の希望の光だというふうに僕は思っています。僕3回視察に行ったのですが、ものすごいです。それが今度まだ小さな規模で多分スタートするのですが、長野に来て、そして長野の一般の学校現場にもそういった何らかの助言だとかそういった形をいただけるということで大変感謝しております。本当にありがとうございます。

【参加者3】

先ほど長野県のイメージという話があったのですが、長野県歌「信濃の国」を昔は誰もが歌えたのが今は学校でも教えないようですが、やはり「信濃の国」をしっかり教えてほしいし、みんなが歌えるようになればいいと思います。信濃教育会が出したDVDで観ていると、非常に長野県のすばらしいところ、きれいに歌い込んであるのです。みんなが歌って、自分のふるさとに自信をもてる。しっかり歌うと、うちはおやきおいしいぞとか、ワインおいしいぞ、真澄おいしいぞということになると、やはり人間が営業マンなのです。その人を見て、その人が自分のふるさとに自信をもてるように、「信濃の国」を、小学校とか中学校とか高校とかで歌って、自分のふるさとはこんなにすばらしいと。北から南から全部歌っているから、県民性一体感も出るし、是非それやっただけであればブランドとか、そういうものは先ほども人間がブランドだという、その人が信州というものを自信をもって、外に行って話した時にこういうものがあるという。私の娘が

大学に行ったら、あなた信州だから「信濃の国」歌えるかと言われたというので、娘が歌ったら「おー」って。こう外からはそういうふうに見えるから、是非そういうこともイメージづくりには、やってほしいとも思います。

【観光部長 野池明登】

「信濃の国」を子供たち全員歌えるようにという目標も考えて頑張っております。ありがとうございます。

【長野県知事 阿部守一】

今、いろいろご意見出たので少しお話したいと思いますけど。エンディングノートとリビングウィルの話は、県議会でもご質問いただいて、県議会事務方の答弁は非常にネガティブに近い答弁だったので、私がポジティブに書き換えて答弁させていただいています。これは行政だけじゃなくて、医療関係者の皆さんとかですね、まず一緒に考えていきたいなと思っていますので、是非須坂市のいいところを学ばせていただきたいというふうに思います。私も父を一昨年亡くしたのですが、最期には意思疎通がなかなかできなかったものですから、胃ろうをした方がいいのかしない方がいいのかとかですね、非常に私自身も親の死に直面して、いろいろ家族の中で悩まなければいけないという経験もさせてきていただいたので。やはり本人の意志、本当に私は今でも父の意志はどっちだったかなというように正直悩むところもありますので、是非そういうものは行政がこれで行くべきだっていうことじゃなくて、県民の皆さんの思いとして、そういう意志をはっきりさせていこうよという動きを、是非私は積極的に作っていく必要があるのかなというふうに思っています。

それから、須坂新校の話で、教育の話いろいろありました。指導者は大事だと思いますし、大学との連携の話も、今県立大学の話で我々高等教育全体を振興しなければいけないというふうに考えているのですが、その中の一つにやはり高校と大学の連携がもっとやっていかなければいけないだろうというふうに思っています。大学の先生方にも高校にもっと出かけていってもらいたいということも必要だと思いますし。それから、産業界、経済界も交えて、どっちかというところ、教育側と人材の受け手の産業界の意思疎通というのがあまりそういう場がなかったものですから、今度高等教育の円卓会議も作ろうというのは、大学とか経済界の皆さんと話していますので、そこに県の教育委員会も入ってですね、大学、高等教育側と高校・中学・小学校との相互補完・相互連携というのはしっかりやっていきたいというふうに思っています。新しい学校は地域の皆さんに支えていただかなければ育っていきませんので、是非よろしくお願いしたいと思います。

それから、翔和学園の話がありましたけども、翔和学園は、先ほどご紹介いただきましたけども、発達障害の若者を専門的に対応してきている NPO です。私もかつて行政刷新会議の事務局次長をやっていた時に訪問して、感動しました。これが教育だと。すごい体力いりますよね。先生方は頭脳の勝負だけでなく、体力勝負で子供たちに向き合っているというのを目の当たりにして、すごいなと

いうふうに思いました。翔和学園のノウハウを長野県も活用をさせていただこうということで今進めていこうと思っていますので。先ほど話がありましたけれども、例えば、スティーブン・スピルバーグとか、トム・クルーズとかも学習障害だというふうに言われています。発達障害の子供たちは、能力は優れた子供たちがいっぱいいると思っていますので、是非そういう子供たちの能力をきちんと引き出すことができる長野県にしていきたいと思ひますし、先駆的な取組をされている皆さんの知恵・力というものを長野県も借りて、取り組んでいきたいというふうに思っています。

それから「信濃の国」の話は、部局長会議でも教育委員会にはきちんと「信濃の国」もっと徹底しなさいという話を私はさせていただいていますので、まだ不十分だなというふうに思うところもありますので、さらに徹底したいと思ひますし、私が最近気になっているのが、県の行事でも歌うことが少し少ないなど。もう少しいろいろなところで「信濃の国」を歌うようにしていきたいと思ひますので、是非よろしくお願ひいたします。

【観光部長 野池明登】

それでは、本日のゲストの宮坂さん、最後に何か一言あれば。

【宮坂公美氏】

長い間ご苦労さまでした。つたない私の話をどんなふうに思われて聞かれたか分かりませんが、是非、私は須坂をまた改めて訪れたいと思ひますし、是非また諏訪にも遊びにいらしてくださいませ。今日はありがとうございました。

【観光部長 野池明登】

最後に、実は7月19日から、「しあわせ信州」をテーマにした動画ですとか写真ですとか絵手紙ですとかマンガですとか俳句ですとか、どんな表現方法でも結構ですので、皆様から作品を募集して、お寄せいただいた作品で、長野県のこのブランド発信のプロモーションビデオを作りたい、ポスターを作りたい、そんな「しあわせ信州を見つけようプロジェクト」という企画を考えております。20日からは、テレビCMが流れますけれども、お先に皆様にご披露させていただきまして、是非ご応募の願ひをさせていただければというふうに思っております。最後にご覧ください。よろしくお願ひいたします。とっても簡単な投稿のサイトになっていますので、是非お待ちをしております。(投稿の締切りは、平成25年10月10日です。)

知事あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

最後に一言。今日は長時間、皆様ご参加いただきまして、大変ありがとうございました。

ざいました。概要版の 22 ページのところに「信州ブランド確立プロジェクト」と載せていますけれども、22 ページのアクション 1、アクション 2 には、「信州ブランドの普及・拡大」と、それから、「商品や物産、サービスの新たな価値の創造・発信」と書いていますが、その下に「県民の皆様へ」と書いてあるのです。

実はこのプロジェクト全部「県民の皆様へ」と書いていまして、例えば、「提供する商品や物産、サービスに込めた「想い」やストーリーを私たちの信州ブランドとして、誇りを持って主張しましょう。」ということをお節介かもしれないですけど、県民の皆様への投げかけで書かせていただいています。随所にこういうことを書いていますので、是非お読み取りください。全部やっていただこうと思いません。ご自分でこれ関心あるなど、あるいは、自分でできるなど、我々の投げかけに一人でも呼応していただければ、長野県は大きく変わっていくことができると思います。今日のテーマの「信州ブランド」も行政だけがやっても、所詮なんかあれは知事が適切なこと言っているのだろうというふうにしかなれないです。県民の皆さんの口コミで、信州はしあわせだよなど、こんないいものがいっぱいあるなどというふうに伝わっていくことが、実は私は一番強い発信力だというふうに思っています。是非今日ご参加いただいた皆様方には、そうした側面でも県政を支えていただくことをお願い申し上げまして、私のお礼のあいさつといたします。ありがとうございました。